

---

がらくたぐえすと

てる。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

がらくたくえすと

### 【Nコード】

N8687Y

### 【作者名】

てる。

### 【あらすじ】

青年が家の倉庫で見つけた剣は、世界を救う最強の”がらくた”？  
王道RPG風コメディックファンタジー、開幕！

## 1・宝探しタイム（前書き）

初投稿作品です。

完全不定期の更新となる予定ですが、完結までがんばります！

なお、本作品は筆者が「昔作ろうとして挫折したRPGのシナリオ」を基にしていますので、ゲームのノベライズ作品風に仕上がればいいなあ、などと思ってたりします。

では、本編どうぞ。

## 1・宝探しタイム

序章〜旅立ち〜

side ???

「そこで反省している!」

尻餅をつく形になった俺の目の前で、頑丈な扉が閉じられる。直後に聞こえたがちゃり、という音はきつと鍵が閉められた音だろう。つまり俺は、閉じ込められたわけだ。

わけだ。じゃねえ!

いったい!どうして!こうなった!

〜回想〜

うちのメイドー(以下メ)「きゃああああ!」

親父ー(以下父)「どうした!」

メ「旦那様!厨房に怪しい影が!」

父「何だと?よし、わしが行こう!」

父「何者じゃ!」

俺「ふへ?(がぶがぶ)」

父「……………」

俺「……………」(もぐもぐ)」

父「お〜ま〜え〜とい〜う〜や〜っ〜わ〜!」

俺「あ、あの、親父?(ごっくん)」

父「何をしとるかー!ー!」

〽回想終了〽

うん、原因判明。  
つまみぐい

いや、ね？ほら、年頃の男子つてのは他人より腹が減る生き物な  
のですよ？それがあんな程度の昼飯で足りるわけが・・・ねえ？

「しっかしあれだね。つまみ食い程度で物置送りとは・・・親父も  
古いね。」

誰に、というわけではないがごちてみる。

べつに俺には電波受信機能なんてついてないぞ？・・・たぶん。

「その分だと反省してなさそうだな、マテウス。」

な？！何処からか声が！！

べ、別に俺は怪電波なんて受信できないぞ？それとも、まさか・  
・？くそつ、俺は電波じゃない俺は電波じゃない俺は電波じゃない  
俺は・・・あだっ！

はい、頭に何か当たりました。いえ、当てられました。石を。

「こつちだこつち！何を幽霊としゃべつとる！」

ふと俺が斜め上を向くと、そこには見慣れた顔が。天窓・・・つ  
て程も高くはないが、一応ここには窓があるのだ。ちなみに、何で  
か鉄格子つきである。

まあ、それはさておき、

「おー、兄貴。何、助けてくれんの？」

「あー、それはないから安心しろ。」

ぐはあっ！

「じゃ、じゃあ何しに来たのさ？」

「決まってるだろ、茶化しに。」

へぶうっ！

「それと、親父から伝言な。『お前、晩飯抜き』だつてさ。」

あべしいっ！

く、くそう、この性悪兄に一矢報いるには・・・  
ぼく、ぼく、ぼく、ちーん！

「あー、平気。兄貴の部屋の菓子見繕って喰うから。」  
「なっ！て、ため、なぜそれをつ！？」

ふふふ、我が兄貴（超甘党）の部屋に菓子の買い置きが山のようにあることなんぞ、両親はともかく俺やメイドたちにとっては公然の秘密というものなのですよ？

「つく、わ、我が弟ながら、やるな・・・！」

「つてかバレてないと思つてた兄貴の思考・・・よりも嗅覚が、心配だね俺は。」

だって、あの部屋、匂いが甘つたるいんだもん。

「やかましわ！・・・ったく、何でこの手の目端と剣の腕だけは利くかね？」

はい、アンタがそれ以外パーフェクトな超人だからです。

そうなのだ。実はこの兄貴、荒事以外は怪物級の超優等生なのだ。何しろあの名門ラウス神学校を首席で卒業し、我らが連盟国枢軸議会の議員たる親父の秘書としてすでに各界のセレブたちに名と顔を売りまくっているうえ、ケンカはからきしのくせにそれ以外の運動は万能、しかも水準はるか上のイケメンと来たもんだ！

うん、実の兄じゃなかったら、石のひとつも投げたくなるよね。

とまあそれはさておき、仮にも名家の次男坊と呼ばれてきた俺ですよ？何かとりえのひとつもないと悲しいじゃない？ってことで、剣だけは本気で鍛えましたともさ。そういう学校にも通ったし。

いい剣士の条件って何だと思う？答えは目が利くこと。相手の力量を読むことに始まって、相手の剣筋を読むこと、自身の剣筋の正確さ、どれもこれも目が最初に働いてこそなんだよね。もちろん、生物学的なものだけじゃなくってさ。

ってわけで、この2つにかけちゃあちよいと自身がある。

「しょーがない、後でなんか持って来てやるよ。ただし、部屋の菓子ことは・・・。」

「オツケ、いやー、いいあにきをもってしあわせだなー。（棒読み）

」

「言ってる。」

そういつて兄貴は引っ込んだ。

よっしゃ、晩メシ確保！て自重しろ俺。閉じ込められてる状況に変化なし！

「しゃーない、せつかくの倉庫だし・・・お宝探索開始じゃー！」

くしばらくお待ちください」

「うーむ、めばしいのはこれだけか……。ち、シケてやがる。」

まあ俺の不謹慎発言はともかく、本当にこの倉庫はガラクタ置き場といった体だった。親父もそれなりの名士のはずなのだが、おいている場所が別なのかたいした物はなかった。

そう、ひとつだけを除いて。

「宝箱……。だよな。なんつーベタな……。」

宝箱。それ以外に表現のしようがあるうか。

朱く塗った木の板で組んだ蓋つきの箱に、鋼鉄製の金具で補強がかけられている。鋸打ちまでされたそれは、明らかに「宝箱」だ。

鍵は……。ついてない。

「無用心だな……。よつと。」

さて、中身はと……。自重？なにそれおいしいの？

「……。剣……。？」



## 2. すげー剣ゲツト！・・・？

side 反省してない男

「・・・剣・・・？いや、刀か？」

うん、刀。

しかも結構禍々しい感じの拵えがついてるやつ。鞘の形からも、サーベル系の曲刀だってことが判る。

俺は当然その剣を抜いた。そりゃね、俺も剣士な訳ですよ。目の前に剣がポンとあつて、見定めたくなるのって当然だと思うわけですよ。

でも・・・わからん。

「真っ黒・・・つやも光沢もなし、黒刀、って奴か。珍しいな。」

黒刀っていうものは、一般の刀より目利きがそもそも難しい。まず金属が何なのか、次にその金属の特性、そしてその錬性、そして切れ味に美術的価値と、見極める項目が多い。

だつてのに、流通量自体がそもそも皆無。世界中のどこに行つても黒刀なんてものは売ってないのだ。「教会」の指定で取引が禁じられてるから、っていうんだがその理由、俺知らないんだよねえ。

まあそんなわけで、黒刀つてのは目にする機会がない。俺自身、図鑑や上流階級が趣味で開いてる「秘宝館」っていう博物館（親父が招かれて連れてかれた）くらいでしか見たことない。こういったものは許可もらってるらしいけど、詳しい話は知らん。兄貴と違って俺力ミサマ興味ないし。

まあ、見てもわからない品だってことは理解いただけたと思う。

「てっ！はっ！てりゃ！」

わかんないんだから、とりあえず振ってみる。うん、いい刀だ。いい刀の定義って人によると思うけど、俺はなんといっても扱いやすさと剛性だと思う。盾の無い片手剣の流派を修めた俺としては、振り軽いことと受けても折れないことが求められる。切れ味は・・・その次くらいかね。

そしてこれは、俺が触れたことのある中でも最高の刀だった。重心が絶妙なのと、残心時の手応えで剛性も伝わってくる。そして風切り音から察するに、切れ味も相当のものだ。

「  
・  
・  
・  
いいな、  
これ」

やばい。

テンション上がる。

「……！」

何、今の？

兄貴の声だった。

悲鳴……だつたよな。

「つち、何があつた!？」

あの兄貴は、大概冷静だ。俺がおちよくつてもうるたえる程度で、決して醜態は見せない。兄貴の叫び声なんか、産まれてこのかた聞いたことが無かった。

それだけで、非常事態が見て取れる。

「くそ、何とかここから出ねえと・・・。」

出たところで何が出来るとも思うだろうが、兄貴はケン力ばかりきし、親父もいい歳だ。万が一荒事のたぐいなら、そう長く戦えるわけが無い。お袋は・・・言うまでも無い。

「・・・こんのやるおあ!!!!」

俺は扉を全力でぶん殴った。頑丈な扉である。殴ったところでどうしようもないのは目に見えてるが、何もしないわけにはいかなかった。

そして結果は、真っ二つ。

真っ二つ?なんで?

俺は恐る恐る右手を見た。

「・・・どーいう切れ味してんだ、この刀。」

うん、刀、握りっぱなしだったよ。

ってか非常識な刀だね。握ったまま殴っただけで、俺別に振っ

でもないよ？ちよつとしたブレで扉に当たった刀身が、木製とはいえ倉庫の扉クラスの頑丈な戸板真つ二つだよ？

「・・・ってそれどこじゃねえ、兄貴！」

俺はこの刀の鞘を急いで腰に差し、倉庫を飛び出した。

### 3・ぬるぬる

side マテウス

「何だよ・・・これ・・・。」

眼前の光景は、今が非常時であることを示すには十分なものだっ  
た。

「・・・気持ちわりい。」

俺の発言、不謹慎とかは言わない方向で。だってとりあえず抱く  
のはやっぱり、それだと思うんだ。

床中にぶちまけられたぬるぬるがぶよぶよと蠢いて形を成してい  
る光景は、絵的に受け付けられないっていうか・・・ねえ？

「・・・スライム・・・だよなあ、これ・・・。」

幸いにも剣術学校に通っていた俺は、そこらの一般人よりはモン  
スターの知識がある。けど、こんなのは別に知識なんて要らないと  
思う。ぶよぶよとした液体モンスターなんて、スライム以外の何者  
でもない。

だが、このスライムって生き物は意外と物騒なのだ。スライムは  
変異種でもない限り大体強酸性。人間はもちろん、大体の武器や防  
具も侵蝕してしまう。下手に傷つけても何度でも再生するし、性質  
の悪さならそこらの凶悪モンスターにも負けない。

「こ、この刀、溶けねえよなあ・・・？」

うん、この心配、当然だよな？

スライムの対処法は大きく分けて3つ。液体部分を無力化するか、術法で存在そのものにダメージを与えるか、核を物理的に壊すかだ。うち術法は論外。術法が使える奴ならスライムの生命力？というか精神力？というか、とにかくそんなものを削り取ることで活動不能に出来る。のだが俺、そんな心得力ケラもないんだよね。

液体部分を無力化、ってのは例えば火とかで蒸発させたり、アルカリ持ってきて中和したりする方法。これは術法じゃなくても構わない。液体部分が使えないスライムはモンスターとして無力、ってことなんだけど、これも除外。火なんか屋内で使えないし、アルカリなんて俺の頭じゃ思いつかない。

となると残るは破壊なんだけど、剣<sup>ツルギ</sup>が溶けるようだと困る。戦う手段としてもそうなんだけど、これ、宝箱に入ってたってことは、きつと高い物だっただと思う。

つんつん

恐る恐る突つついてみる。結果は・・・大丈夫っぽい。この刀、何で出来てるんだろね？

まあそれはさておき、武器が大丈夫ってのはありがたい。このスライムを無視して兄貴たちの元へ向かうのは良策とは思えない。挟み撃ちの危険性もあるし、何より通してくれそうに無い。

ひよっとしてつついたの、痛かった？

だって、このスライムたちの殺気、明らかに俺に向いてるよね？そもそもスライムってそんなに知能高くない。目的があつたとしても怒ったらそっち優先になるのは動物といっしょだ。

「冗談じゃねえぞ・・・！」

一斉に向かってきそうなスライム達を前に、俺は刀の握りを改めた。

side マテウス out

side ???

この町に来たのは、初めてではないがそう多くもない。  
だが、この町は実にいい空気を持っているので好きだった。人々の活気ももちろんなのだが、なんといつても空気の清浄さが他所とはまるで違う。

当然といえば当然だ。この町は広大な森林地帯の中にぽつかりと開くように存在している。町と呼べる規模なのは街道の整備が整っている影響だろう。「氷の港」と呼ばれる交易の拠点ハイネル港と「教会」のお膝元「宗教都市」セノワストの中間地点という立地は、人が集まるには十分すぎる理由だ。

「深緑の町」リネル。ここが私の今回の任務先だ。

「きゃーーーーっ!」

悲鳴!

私は駆け出した。任務とは多少違うが、悲鳴を見過ごせるほど無関心ではない。それに・・・

「せあっ!」

腰の剣を抜き、女性に襲い掛かっているスライムの核を斬りつけ

る。スライムはその体を保てずに崩れ、地面に染み込むと跡形もなくなった。

「お怪我はありませんか、お嬢さん？」

「は、はい、あの・・・ありがとうございます・・・。」

「気にすることはないよ。市民を守るのは騎士の務めだ。」

そう言いながら私は、近くにいた青年を呼び止める。

「君、済まないが彼女を安全な所に。私は行かなければならない所があるからね。」

「え、ええ、わかりました・・・。」

青年の言葉がしどろもどろになっているのは、騎士と話すので恐れているのかもしれない。親しみの持てる騎士、例えば部下のヨハンならばこうはならないだろう、要修練だな。

それに先ほどの女性もやっと恐怖と緊張が解けたのか、先ほどより血色がいい。一気に緊張が解けたのだろう、林檎のように真っ赤になっている。動揺させてしまったか・・・修行が足りないな。

「しかし街中でスライムとは異常だな、リードルス伯はご無事だろうか・・・。」

伯の屋敷にはアレがある。モンスターの本能から鑑みるに屋敷はきつと修羅場だろう。

私は腰の鞘に剣をしっかりと収め、屋敷へ向かう歩を速めた。



#### 4・決戦！俺の家

side 普段は冷静沈着な兄貴

「父さん！母さん！」

久しぶりの醜態をさらしてしまった俺だが、恥をかいた甲斐あつてか両親とは合流できた。

「スタウト！無事であつたか！」

「あらあら、よかったわあ。」

・・・なんか、拍子抜けな気がするのは気のせいですか、母さん？  
というか、愛剣たる水晶剣「ミラージュ」を手に奮戦していたであろう父よりも、アルカリ洗剤塗ったフライパンでスライムを相手にしてる母が気になって仕方がない。

まあ、いろいろ規格外な人だし、デタラメ気にしたら負けなんだろうな、  
きつと・・・。

「ねえスタウトさん、マテウスさん見てないかしら？あの子さつきから探してるのだけれどどこにもいないのよお。」

「あー、あいつなら倉庫で反省してる？けど・・・って、危ないじゃないか！」

忘れていたけど、考えてみれば危ない。何しろ非常事態なのだ。  
引つ張り出てきて一緒にいたほうがいいに決まっている。反省は・・・  
また後日つてことで。

「心配はいらん。あそこは特別な倉庫で、出られんが代わりに入れん。窓から入ってくる程度のスライムなら、あいつの腕前には問題にもならんだろ。」

「腕前って、あそこ剣とか置いてあるの？」

「無くてもあそこには処分する予定のガラクタと、あとは術法で強化封印した箱が置いてある。使い捨ての武器程度でもあいつなら何とかする。」

余談だけど、ちょっぴりマテウスを羨ましいと思った。俺は父さんから期待されているほうだとは思う。いつだったかマテウスは「俺は別段期待されてるわけじゃないしさ」なんて自嘲<sup>わら</sup>ってたけど、その代わりあいつは、多分腕っ節だけだろうけど、父さんに信頼されてる。あいつは氣付いてないけど、俺にはそんなものかけられたこと無い。悔しいから教えてやらないけどな。

まあそんなことより、氣になった物がある。

「・・・はこ？」

「『教会』からの預かり物だ。下手な結界より頑丈な特注品だから酸などでは溶けん。『教会』の道士様が3日かけて法力を煉り込んだ一品とのことだ、開けられなくても鈍器くらいにはなるだろう。」

へー、そんなのうちにあったんだ、とも言いたくなるけれど、うちの事情を考えればそんなに不思議なことでもない。「教会」の学校に通ってた俺の縁もあるし、宗教都市と氷の港<sup>セノフスト</sup>の中間地点にある町<sup>リネル</sup>の顔役である父自身がそもそも教会とつながりが深い。

が、それはそれ、これはこれ。

そんなものがあることは、別の意味で問題だろう。

「・・・スライムって、法力に寄ってく習性あったよね。もしかしてこの襲撃って・・・。」

「・・・あ。」

こんなうつかりおやじが連盟国の中枢に居るんだから、大丈夫かねこの国？

とはいっても今は父さんに頼るしかない。父さんはこれでも優秀な武人だし、俺もてんで駄目とはいえ戦わなきゃ溶けてスライムのパーツになるだけだ。母さんも守らなきゃ、今後二度とこの二人の長男なんて名乗れなくなる。

俺は近くにあつた筈の柄を握り締め、考えるのを止めた。

マテウス、無事でいろよ。

side スタウト out

side 親の信頼に気付かないドラ息子

「・・・へつくし！」

誰だ、俺の噂してんの？え、風邪？・・・ひかない自信ある！って胸張ることでもないけどさ。

しっかし、さすがにしんどくなってきた。スライムって対処さえ知ってれば別段強いモンスターじゃないんだけど、さすがにこう多いと・・・疲れる。

加えて、うちの屋敷って構造が無駄に複雑なんだよね。玄関ロビーから詰め所前の廊下に入ってパーティ用のフロア、奥の使用人エリア、階段上つて来客用寝室エリア、そこから奥の扉開けて食堂、から階段下りて浴室、戻ってキッチン、の脇を抜けてプライベート

リビング、から各自の寝室および書斎なんて具合で、腹立つくらい構造がめんどくさい。旧貴族の家で防犯を考えた伝統ある屋敷っていつても、もうちょい簡単でいいと思う。だって、部屋に着くまでに疲れるんだもん。

ちなみに、俺が閉じ込められてたのは別棟の倉庫ってか物置だわな。つまり屋外。

「くそつたれ、なんでこんなにいるんだ、よっ！」

また一匹仕留める。もう30は斬ったと思う。何だってこんなに大量にいるんだ？ つか、ほとんどが俺のほうに向かってきてるのは、さっきつづいたのもはや関係ないんじゃないか？

「どいつもこいつもっ、俺まっしぐらって、何の恨みだつての！」

まとめて三匹払う。そういえばこの信じられない名刀、溶けるどころか全く切れ味が落ちない。これはこれで頼もしいんだが、そろそろ終わってくれないと俺のほうがもたない。

そうこうしてるうちに、親父の書斎の前にたどり着く。ここは建物の構造がしっかりしてるらしいから、何かあったらここに逃げ込むように家族で打ち合わせてる。まあ、旅行で迷子になったときの待ち合わせポイントを決めておくようなもんだ。

の、だが。

「・・・あのさ、そこどいてくんねえかな・・・。」

親父の書斎の前には、で〜んとスライムが居座っている。しかも、ごっついでかいの。さっするに、親玉。さすがに最後がこれっての

は、ちょっと精神的にキツイ。

「無理ってんなら、力づくでどいてもらうぜえ……。」

フラストレーションたまりまくりの俺は、目の前の巨大スライムに当たり散らす事に決めた。決めたったら決めた。

「兄貴！……親父、お袋まで！無事かつ！」

巨大スライムを片付けて扉をぶち破る。ぶち破ったのは鍵とかかかってるかなあと思ったんだけど、簡単に吹き飛んだところを見るとかけてなかったらしい。やりすぎたかなとも思う。うん、反省。

「マテウス！生きてたか！」

「あらあら、無事でよかったわあ。」

「無事か！しかしお前、どうやって出たのだ？」

三者三様だが、とりあえず応答は返って来た。どうやら無事らしい。

「……よかったあ……。」

情けない話だが、家族の無事を知って腰が抜けた。突入してくるときに使用人たちは外に逃がしたから、人的被害はゼロ。うれしい限りだ。

「何だマテウス、でんち切れたか？」

「やかましい！どっかの誰かさんの悲鳴のおかげで大慌てだったん

だよ！」

「うぐぐ、口の減らないやつめ……。」

ニヤニヤしてからかいに来る一番の役立たず（多分）に、反撃の意味もこめて皮肉を返しておく。黙り込んだアホは放つといて、親父のほうに向き直る。

「……で、親父？ひとつ聞きたいんだけど……。」

「うむ。」

今この部屋には、俺含めて5人いる。俺、親父、お袋、兄貴、そしてもう一人。銀髪に銀の鎧、剣の拵えも白っていう何か純白なイメージは、どこと無く俗世を離れた印象を与える。そしてその容貌は、女子百万年の憧れにして、おおよその男の不倶戴天の敵。

「そのイケメン、誰？」

えらいイケメンが親父達の後方に、なんとも所在なさげに立っていた。

## 5・親父もがんばってました（前書き）

今更のお願いですが、感想・ご指摘などいただければ幸いです。  
素人の習作ですので、より多くの推敲を交えてよい作品にしていきたいと思っています。

では、本編をどうぞ。

## 5・親父もがんばってました

side うっかりな親父、の回想

「むう、数の不利は否めんか・・・。」

自慢ではないが私は武人としてはそこその所にあると自負している。一応ではあるが然る剣術流派の免許を皆伝した程度の腕前と、思っただけは通じるだろう。旧国家時代に伯爵位に就いていたリードルス of 当主として、それくらいは教養のひとつだ。

しかし、一人で多数を相手にするというのは勝手が違いすぎる。剣だけならば私よりもはるかに使える次男坊を倉庫に放り込んだ手前、あれに頼ることは今更出来ん。長男は武術だけは何の因果かさっぱり、さらには妻を守らなくてはならないのは言うまでもあるまい。まあ、思いのほか善戦出来てしまっている妻には驚いたが・・・。

「父さん拙いよ、このままじゃやられ・・・。」

「言っな。どうにかできると信じて動く者だけがどうにかなる。散々言い聞かせてきたはずだぞ。」

これは私の座右の銘だ。家訓と言い換えてもよい。尤も私が定めた物になるが。

原典では「天は自ら助くるものを助く」というが、息子達が幼い頃に噛み砕いて教えるために随分と砕けた言い回しになってしまった。しかし、息子達はこの言葉の方を未だに覚えていてくれるらしい。親馬鹿だが、今更改める気もない。いわば、息子達との絆なのだ。



とはいえここまで不利な状況というのは心が先に悲鳴をあげるものの、息子の悲哀はわからんでもない。何しろ私だけでももう十五は突き倒したというのに眼前に広がるのはまるでスライムの海。最低でも今ここにいる分すべてを倒さなければならぬ。そして妻のかけてきた次の一言がさらに苦境に拍車をかける。

「ねえ、あなた？」

「・・・何だ？」

「洗剤、切れちゃったみたい。明日からどうしましょうねえ？」

妻よ、明日より今の心配をしてくれ。頼むから。

しかし、それはそれで拙い。何だかんだで妻も戦えていたのは洗剤を塗ったフライパンという武器の相性によるものだ。酸を無力化できるアルカリとして洗剤を即座に思いついた妻はさすが家庭人というほかはない。メイドもいるというのに、厨房だけは未だこの妻の領域なのだ。

閑話休題。

その洗剤がないということは、フライパンひとつしか手元に無いという事を意味する。そしてそんなものはすぐに意味がなくなる。溶かされてお終いだ。

私は、家長として一つの決断をせねばなるまい。

「セルシア、スタウト、私を置いて2歩下がれ。」

「??？」

「!!!」

スタウトは察したか。妻は・・・察せぬ方が幸せかも知れんな。守りすら捨て、道の一本でも開ければと突撃を試みる。乱れ撃ちでしかない剣閃でも、うまくすればいくつかの核まで届くかも知れ

ん。家族の逃げ道さえ開けばよし、開けなんだとしても守るべきものより後に倒れることなど、私自身の矜持が許さない。

そう、捨て身の覚悟。

「目に物見せてくれる・・・これがアドナレス・リードルス生き様よー！」

覚悟とともに、大見得を切り飛び出・・・そうとした。そう、しようとしたのだ。

だがそれは、イレギュラーによって阻まれることになった。

「伯、ご無事か！」

窓から飛び込んできたのは、フルアーマー全身鎧の剣士・・・騎士だった。

「・・・おお、そなたは・・・。」

「緊急ゆえ、抜刀いたします。御免！」

果てしなく白い閃光とともに、轟声はその場を支配した。眼前のスライムたちが見る見るうちにその数を減らしていく。まさに奇跡。その閃光の生む軌跡も、急速に収束していくこの戦場も。

そうしてもものの数分で、スライムの影はこの部屋から消えた。

命を捨てずにすんだことに私は安堵した。馬鹿な真似をした父の背中に刺さる妻と息子の痛い視線を浴びながら。

## 6・せわしないごあいさつ

side ちょっと置いてかれ気味なイケメン

「・・・という具合に助けに来た騎士、ってことで理解してもらえるかな？」

伯のご子息という青年に向かって簡単に名乗る。二人いる子息のうち、後から飛び込んできた方が次男だという。家族の無事を知り安堵で腰を抜かしたその心根は、傍目に見ている私にとっても非常に好意の持てる青年だと思える。尤も戦場に跳び込むような真似はいただけないが・・・。

「・・・分かった。それはいいんだけどさ、何で騎士が助けに来れるんだ？セノウスト宗教都市って、あんまし行ったことないけど歩いたら二日はかかるぜ？」

「こら、失礼だろう！騎士様に何と言う口の聞き方をしとるか！」

「伯、構いませんよ。自分は若輩の身です、歳も近そうだ。私は19だが、君は？」

「・・・17。確かに騎士にしては若いよな。」

17か、彼の言うとおり自分も若い方だが彼も若いな。

とはいえ、彼の所作振舞はたいしたものだ。とても17の若者とは思えないほど隙がない。そういえば彼は腰に剣・・・いや刀を差している。おそらくだが剣の心得があるのかもしれないな。

しかし・・・あの刀、どうも見覚えがある気がするのだが・・・何だったかな？

「・・・騎士さん？」

「え、ああ、すまない。少し考え事を、ね。」

「ならいいけど・・・結局答え聞いてないよね？何で来れたん？」

「ああ、任務があつてね。・・・つとそうだった！」

忘れてた！任務で来てたんだった！

いかな、如何にここが居心地良いといつても任務を忘れるようでは・・・。むう、一罰必戒、帰ったら素振り追加で100はこなさねば・・・。

つと、また思考がそれた。よし、まずは済ませてから考えよう、うん。

「伯、本来の自分の任務なのですが、伯に預けた宝具の視察というものです。保管場所まで案内願えますか？」

side 騎士 out

side 礼儀知らず

「・・・行つちまいやんの・・・。」

「仕方ないだろ、本来は視察任務だけのはずなのに助けてくれたんだ。それに本来の任務を済ませたほうが騎士様も落ち着けるだろ？」

「そうねえ、騎士様も今日帰路に就くのは忙しないわねえ。今日は泊まっていかれるでしょうし、そのときにお話したらいいわよね？」

兄と母の言葉にそれもそうだ、と頷いておく。実際聞いてみたいことはたくさんあるしな。

剣くらいしかとりえのない俺には、この世界の就職事情はひつじよーに厳しい。何せつぶしが利かないのだ。剣が出来てどんな仕事

があるって、騎士や軍属を除けば冒険者や傭兵、私設SPといった「いかにも真つ当じゃありません」業界が主流だ。実際、俺の同期生や先輩達はほとんど各国の国軍に所属している。俺は親父が政治家なもんだから軍属は最初から諦めざるを得なかった。だもんで騎士になるというのは、俺としても1つの夢だった。まあ、「教会」所属にしては信心薄いの問題だらうけど・・・。

なんて考えていたら結構百面相してたらしく、兄貴が話しかけてきた。

「あー、考え事か？」

「んー、まあ、ね。ほら、一応俺も騎士になるのちよつとした夢な訳だし？」

「じゃあ益々いろいろ聞いたらいいさ。ひよつとしたら口利きしてもらえる・・・ことはないにしても、聞いたいて損は無い事だと思うぞ？」

「だな。」

「じゃあ話変えるけど、その剣・・・いや刀か、どうしたんだ？」

「そうよお、そんな高そうな剣、買えるようなお小遣いあげた覚え無いわよお？」

「ああ、これ？これは

」

「大変じゃー！ー！」

親父が血相変えて飛び込んできた。血相を変える、で辞書引いたらこんな挿絵が載ってるんじゃないか、ってな具合に絵に描いた血相の変え方だ。まあ、辞書なんて引いたことないけど。

「親父、どつたの？」

「教会から預かっておった宝具が無くなっておるんじゃ！法力で封印された箱も御丁寧に開いて・・・げぼげぼ。」

「父さん、無理しないで。ほら落ち着いて深呼吸、すー、はー。」

「すー、はー、って何をさせおるかぁー！年寄り扱いするでない。そ、そうじゃ、マテウスよ、お前を閉じ込めていた倉庫なのだが、何か見てはおらんか？」

うーむ、親父ナイスノリツコミ・・・はいとしても、宝具・・・宝具ね・・・法力で封印された箱ねえ、うーん、どっかで聞いたような・・・なんだっけ・・・むう・・・ぐう。

「寝るなバカモノ！」

「お、親父タンマ！ジョーク、ジョーク！」

「なお悪いわ！」

ごちん。

痛い頭はさておいて先ほどの箱だが、非常に残念なことに心当たりがある。うん、あれだよねえ、どう考えても・・・。何かやな予感したんだよね、取引禁制品だし、部屋の中に場違いな箱だったし、でも、まあ、生き延びられたんだし、きつと悪いことにはなるまい、うん。

「あー、その宝具って、これ？」

俺は腰に差した鞘ごと刀を取り、親父の前に差し出した。

「な、な、な・・・。」

うん、見ものだったね。親父が泡吹いて倒れる姿。

## 7・旅立ちと彼の名

side 未だ名前の出てこない騎士

「うん、大体は分かった。」

私は失神してしまった伯を協力してソファまで運び、ダイニングをお借りして御子息に話を聞くことにした。ご家族も心配なのかダイニングから離れようとしなかった。

彼の話をもとめると、宝具の刀は宝箱（封印の箱のことだろう）に入っていて、箱は簡単に開いた。これはいい。箱を調べたけど、術式が劣化していて法力が散ってしまっていた。魔除の加護も開けたときに消えてしまったようで、これでは鍵としての役割の方は期待できない。

そして中に入っていた良さそうな刀を試し振りしていたところ悲鳴が聞こえ、その刀で脱出した後スライムを30ほど切り伏せた拳闘巨大スライムを倒して我々のいた書斎に飛び込んできたとのこと。

だが、二つほど、気になることがある。

「ええと、質問してもいいかい？」

「・・・ああ。」

半ば尋問のようになってしまったからか彼の表情は硬い。が、この際気にはいられない。下手をすれば大事なのだ。

「じゃあ一つ目。君は巨大スライムを倒してきたと言ったけど、その実力はいったいどういうことなんだ？普通のスライムはともかく、一般人に相手できるような代物じゃあないはずだよ？」

彼の所作振舞から腕が立つのは見て取れるが、その腕前は高すぎるといっても過言ではない。何しろ撃破を確認したスライムの核からして、我らが騎士団ならともかく国の正規軍ならば10人単位の討伐隊が組まれるようなサイズだ。スライムの実力はサイズに比例するといわれており、単独で相手するのは私とて出来れば避けたい。答えたのは、彼の兄君だった。

「こいつはクレイマン衛士学校の卒業なんです。剣術だけならすでにうちの親父以上に強いんですよ。」

なるほど、あの名門校の……。

クレイマン衛士学校は深緑<sup>リネル</sup>の町に本校を置く武人の名門校だ。武芸と兵法に重きを置き、卒業すれば軍人としての栄達が約束されるというまさに名門だ。納得。

「成程、心得があるだろうとは思ってたけど、そういうことか。」

「……で？二つ目は？」

彼は面映そうな表情を浮かべながら話を流そうとしているようだ。察するに自慢になりそうな話題で語りたくなかったのか。初手柄をあげながらも自慢にならない様抑えながら報告をする新任の騎士と同じ顔をしている。

閑話休題。

もうひとつの疑問の方が重要だ、何しろ宝具の存在そのものに関わる。

「うん、その刀、そもそも鞘から抜けないはずなんだが……君はそんな刀でどうやって戦ったんだ？」



side 騎士 out

side 名門出にとっても見えない男

・・・は？

「ええつと、鞘のまんまぶん殴る、とか？」

兄、黙れ。そんな野蛮な戦いしてない。

「いや、鞘は法力のこもった本体はともかく、装飾が後付で脆いんだ。そんなことをしたらもう少しボロボロになっている。」

「いや、これふつーに抜けたけど。黒刀なんてレアもんだつたからスライムでも溶けないし、切れ味も振りやすさも逸品だったんで戦いやすかったぜ・・・て、どしたん？」

全員絶句。まあ、意味合いがそれぞれ違いそうだが。

兄貴はまず、すっげえジト目で見てる。明らかに疑ってるだろアンタ。お袋はお袋で嘘には敏感な人だから、事実を言ってるのだと確信してるらしく納得している。いや、話そのものに矛盾があるってことには・・・気付いてないんだろうな、お袋だし。

んで、騎士の方は・・・なんか考え込んでいる。もしかして俺、やっちゃったっばい？

「あー、騎士さん？」

「ん、済まない、また考え込んでしまったな。君、今その刀抜けるかい？」

そういえば抜いて見せればそれで済んだんだよな、うん。よし、鞘の鏢元に指をかけて……。

よ、あれ、おつかいな・・・ふんぬぬぬぬ、ぬぎぎぎぎぎぎぎぎ・  
・。

「抜けないね。」

「抜けないな。」

「抜けないわねえ。」

三人の視線が痛い。いやこれ、マジでどうなってるんだ？さつきはするつと抜けたのに、今はまるで鞘が刀身そのものになってるみたい。固い。

「...ふふふ。」

「こっちが聞きたい。」

兄よ、頼むから黙っててくれ。話が進まん。

「しかし、抜けたというのは事実だろうね。」

┐  
?  
└

「宝具の剣が黒刀であるというのは『教会』でもあまり知られていないことではないんだ。そもそも宝具の存在自体、秘密にはしてないが知っているものも少ない。詳細については教会の図書館で調べないと判らないことだし、図書館は入館許可証の発行が意外と面倒で入れるものは多くない。黒刀だと君が知っているということが、その刀を抜いたことがあるという証明さ。」

「……そうですか……。」

つまり同時に、この刀は本物の宝具それだということだよな。

「なあ……。」

「何故抜けたのか、かい？それは私もわからない。」

「あ、そ。」

残念。

「だが、宗教都市セノウストの本部ならわかるかもしれないな。」

「調べられるのか？」

「図書館があると言ったろう？生憎な事に私は入館許可証を持っている。図書館になら資料があるかもしれないし……君も来るかい？」

へ？今何だった？

「そうだな、それがいいだろう、行ってきなさい。」

「親父？目え覚めたのか？」

「うむ。第一騎士殿にも証人が必要だろう。お前なら騎士殿の護衛代わりにもなる。騎士を目指しているなら『教会』本部を見ておくのも勉強のうちだ。」

う、反論させない気がこの親父。寝起きのくせに周到な。

でもまあ、一理あるってか真理だよねえ。しょうがない、行つて来るか。

「……わかった、行つて来るよ。けど、その前にひとつ話がある。」

「？」

つまり、これから二日……往復だから四日か、は旅に出ること

になるわけで。

その騎士は、短いながらも旅の連れになるわけで。

「俺はマテウス。騎士さん、あんた、名前聞いてないよな？」

騎士さん、なんぞと呼び続けるのは結構不便なわけで。

「・・・はははっ、そうわれれば忘れてたね。」

・・・ははは、で済むうっかりじゃないわけで。

「私は『教会』本部・教皇猊下直属騎士団「青天」隊副長、「アルトス・ゼシカ・インダクト」だ。通名は「ゼシカ」で通している。よろしく。」

そう言う騎士　ゼシカは右手を差し出してきた。

ちくしょうイケメンめ絵になるじゃないか。う、羨ましくなんてないんだからねっ！

序章　旅立ち　了

## 7・旅立ちと彼の名（後書き）

というわけで序章終了です。

本作の形式ですが、章末に主要人物の紹介をはさんで次章に進むという形で行こうと思います。なるべくそれ以降のネタばれは避けようと思います。

しかし1回の投稿長くした方がいいのかなあ、プロット分全部書くと100話ゆうに超えるんだが・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8687y/>

---

がらくたくえすと

2011年12月21日14時53分発行